

---

## ある新聞記事より

---

9月5日 毎日新聞の一面の片隅に「余録」のコーナーに、パラリンピックの選手の心打たれる言葉が紹介されていました。

(アメリカ) スタッツマン選手：アーチェリー

「できないこと？まだ見つけられていないな。」

☆生まれつき両腕がなく、足で弓を射る。283メートル先の的を射抜いてギネス記録に認定。

(トルコ) ボヤジ選手：水泳

「できること、その力を見せつけてやろう。」

☆魚は腕がないのに泳げると気づいたのが水泳との出会い。

(日本) 杉浦佳子選手：自転車

「最年少記録は1回だけ。最年長記録は何度でも更新できる。」

☆ロードレース中の転倒事故で脳に障害を負った。失意の中希望を提供したのも自転車。

「失われたものを数えるな。残ったものを最大限に生かせ。」パラリンピックの父と称されるグトマン医師の言葉を生きる。

(イタリア) ビオ選手：車いすフェンシング

「パラリンピアンはすでにこの舞台に来る前に何かに打ち勝ってきている。」

☆東京での活躍は長い人生の一場面に過ぎないと……。両手足に義手義足を着けたフェンシングの王者。

筆者は「挑戦し続ける人々の言葉に励まされ、『できない理由』ばかり探す日々を自省した。」「戦い抜いた4400人と支えるすべての人に、心からの拍手を。」と綴られていました。まさに今、私たちの制限された日々の生活の中で、できない理由を探し、嘆いたり、誰かのせいにしたり……。今、自分にできる精一杯のことにチャレンジしようとしているかと振り返ると同時に、私たちはみな、あらゆる可能性を自身の中に持ち合わせていることを再認識させてもらった記事でした。

これからの世の中が今後どうなっていくのだろうと不安なことばかりですが、どんな状況であろうとも、今と将来をたくましく生き抜くことができる子どもたちの育成のために、確かな学力（社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質能力）を学校できちんとつけることこそが今私たちに課せられた使命なんだと改めて考えさせられました。

---